

研究的人生のすすめ

《現状維持は精神の退廃を招く》

すずき たけお
鈴木武雄

(日本オイラー研究所・元掛川市教育センター)

(2011年12月18日)

[要約] 昭和43年(1968年)3月、ぼくは教員になりました。5月自転車で家庭訪問をしました。保護者の方々の中には「先生様よくおいで下さいました！」と言って迎えてくれました。ぼくは、まだ25歳になったばかりの教員でした。そこには若い未熟な教員を最初から教師として尊敬する気風が存在していたのです。しかし、現在はどうか。教員による不祥事の報道。生徒達による万引き事件の監査委員会による学校名公表など、教員と学校、教育委員会制度まで厳しい批判にさらされています。特に、公立学校教員は身分的に守られています。この激動の時代、雇用が不安定な時代、安定した教員が注目されるのは自然なことです。教員の教育力と指導力が問われているのです。特に指導管理的な立場にある教員(校長、副校長、教頭)は、時代の先頭に立たなくてはなりません。教員は尊敬されてはじめて教師になれるのです。学校は本来の目的である学舎(まなびや)になるよう再構築することです。現代市民社会における学校の役割を再構築することです。現状維持は精神の退廃を招きます。そのためには一人一人の教員が、研究的な教育力、研究的な勤務、研究的な生活を実践するしかありません。一人一人の教員が指導者として尊敬される存在になり、教師に近づくことです。教員集団もお互いに高め合い協力協働する教師集団へ変革しなくてはなりません。教員個人個人と教員集団が精神の退廃を招かないためにも。

第1節 研究的人生とは?・・・現状維持は精神の退廃を招く

研究的生活とは何か?。それは日々の生活の全てに好奇心を持ち、少しでも改善・工夫・改革を実践することです。

ぼくは中学校に32年間、小学校5年(*この間3年間は小学校長と幼稚園長を兼務)、合計37年間勤務しましたので、非常に多忙な学校を知っています。ただ、高等学校と小中学校および幼稚園とはその様子は異なります。それでも人間が感じる多忙感は個人的な感じ

方ですが、それほど大きな変わりないと思います。現状になれてしまうのです。多忙と言うことで自分を誤魔化すこともあります。

しかし、「多忙」は「心を滅ぼす」のです。ものすごく多忙でも、その仕事の一つ一つを、

①箇条書き

②優先順位をつける

ことによって、かなり状況は変化します。

でも最も重要なことは、現在抱えている最も大きな課題に挑戦することです。ぼくが30代後半からずっと最大の課題は、学校崩壊（*状況と表現として様々ですが）を止めて、だれも（*特に弱い子供・生徒）が安心して学べる学校を構築することでした。最大の課題に挑戦することによって、他の中小の課題は自然に解消（解決）していくことがあります。

現代における中学校の学校崩壊は、実に先進国が抱える共通の大問題なのです。そのような意味で、学校崩壊そのものは現代社会の主要な課題と直結しているのです。現代の重要な社会問題ですから、挑戦する価値があります。また、それは現代の学問研究に直結するはずで、はたして、政治学ばかり、社会学、哲学、歴史学など、ぼくにとって克服するための最大の拠り所になりました。人類による長い学問研究の成果（智慧）に得ることがあるはずだからです。それ書物に書かれている以上のことであるならば、それこそが学問研究の大きな課題です。実際的に、問題を起こしてしまった生徒達が家庭裁判所に送致されることになったことがあります。警察は『少年法』『少年警察指導要綱』によって、生徒達を処置します。家庭裁判所は、少年調査官が直接対応してくれます。ぼくは家庭裁判所の審判も何回か出席しましたが、少年審判は通常の裁判とは異なります。大きな机の正面に裁判官が座り、その左右に少年調査官と書記官が座ります。保護者と教員は、後ろ側の席です。検事は参加しません。審判全体は裁判官が統括します。このことを少年事案の家庭裁判所への全件送致主義といいます。ぼくがこれらの法律や判例を熱心に勉強したことは言うまでもありません。その結果、少年担当警察官、家庭裁判所の少年調査官、裁判官とも対等な立場で話すことができ、お互いに信頼関係を創ることができました。その結果、問題を起こした生徒達にたいして裁判所は適切な処置がされたと思っています。

とにかく、挑戦する心持ちとして、大切なことは、「逃げない!」ということです。課題から逃げれば逃げるほどそれは追いかけてきます。それは大きな悩みとなり、多忙感や焦燥感にもなります。

しかし、逃げないで中央突破を試みても、そこで玉砕しては困ります。だからこそ、普段の幅広い学問的修養と研究的な姿勢は大切になります。そうでないと全てを対処療法的に対

応してしまい、結果的に最も重要な課題から逃げてしまっていることなのです。

すなわち、短期的な対処と同時に、長中期的な課題として考えて実践を積み上げることで、ぼくの場合、それが現在の数学史研究にどれほど役に立っているか図り知れません。

まず、日常生活、日常勤務のすべてを少しずつでも改善・工夫・改革することです。研究的な人生とは、日常的に改善・工夫・改革を目指す精神そのものです。

現状維持は精神の退廃を招きます。

第2節 研究的人生の効用・・・・・・・・・・全く新しい出会い「《友、遠方より来る！》」

研究的な生活で、最も愉快なことは、突然のすばらしい出会いがあることです。しかも、これまで全く予想できない出会いです。二、三の例をあげます。

昨年(2010年)8月末京都大学・数理解析研究所で恒例の数学史の研究集会が開催されました。ぼくは『「幾何学原礎」の翻訳者山本正至について』と題して、45分間の講演をしました。その講演が終わった直後、外国人の若い女性がぼくのところへ来ました。ブロンドの髪の毛で、もちろん素晴らしい美人でしたので、より驚きました。後で判明したことですが、フランスのリヨン大学の博士課程に在籍し、現在神戸大学の大学院へ留学し、数学史を研究している方でした。彼女はヨーロッパと日本との交流史における数学史を研究していて、特に明治日本の数学史に大きな関心を持っていました。それでぼくのところへ話に来たのです。彼女は日本語も上手でしたので、とても話が弾み今後の情報交換の約束をしました。メール交換もし、現在フランスに帰国した彼女と交流を継続しています。

これは10年以上の前の話です。突然手紙が来ました。よくあることです。中国からの手紙でした。封筒を開けてみると、名前が「烏雲其其格」とありました。この方は内モンゴル出身で中国科学院博士課程で日本数学史を研究している女性であることが判明しました。ぼくがそのころ自費出版した『和算の成立』を所望してきたのです。研究のことですから、差し上げました。その後の交流はありませんが、彼女はその後東京大学大学院博士課程へ進学し、博士号を取得したようです。その博士論文は中国語で『和算的発生』（上海辞書出版社、2009年）として出版されています。

昨年からペーター・ハルツック(1637年-1680年)という九州の平戸生まれの日独混血児について追究している過程で懇意になったのは、ドイツ人の学者(*専門:日欧関係史)です。彼は現在日本大学の准教授をしています。彼自身、東ドイツから西ベルリンへ脱出した数奇の人生をたどっています。出会った瞬間から親友となりました。ペーター・ハルツックの研究を介して親友となったのです。

突然の出会いは研究的な生活をつづけていたお陰です。直接的な出会いと交流は、人生を豊にしてくれます。

教科書や本でしか知らなかった方々（著者）と親しく話ができることも、新しい世界を開かせてくれることになります。著者から直接話を聞くことと、その著者の本を読んだだけよりもずっと深い味わいがあります。最近では、本や論文を頂戴することが多くなりました。もちろん、ぼくの本や論文を差し上げていますから、物々交換なのですが。

2005 年定年退職をして掛川教育センターに勤務しました。そこは中学校の跡地でしたから、非常に敷地が広く、その研修の組立手配と敷地の管理を任されました。管理とは除草作業です。広大な場所の管理など普通に考えますと大変で嫌になると思います。でもそこで覚えたのが、効果的な除草の方法と実験的な野菜づくりです。草の種類や特徴によって除草が異なります。昭和天皇が「雑草という草はありません！」という有名な言葉を遺されています。一つ一つの草にはそれぞれ立派な名前があり、植物（生物）としての使命を果たしているのです。それは「雑用」という言葉によって、人間は物事を「雑」に考え、「雑」に対処してしまいがちなことに通じます。実験的野菜栽培は、掛川教育センターの研修項目にもなりました。掛川教育センターを退職しましたが、ぼくの自宅から1キロくらい離れたところで畑を借りておこなっています。現在200坪以上で20種類以上の野菜を実験栽培しています。実際には野菜が採れすぎますので、子ども達の家族に送ったり、近所にお裾分けします。近所の農家でも多忙で、野菜が作れないのです。ぼくのことを知っている近所の人々は、ぼくの変身ぶりに驚いています。ぼくが「本ばかり読んでいる先生！」くらいの認識しかなかったからです。そのぼくが、農家よりも野菜づくりが熱心で様々な工夫をして、しかも成果が上がっているからです。近所へ野菜を上げることで、別の野菜をいただきます。野菜によるコミュニケーションづくりが自然に出来ました。近所関係をリメイクしたわけです。最近では放射能汚染問題もあり、野菜への関心も高く、非常に重要です。東北地方の研究仲間へも野菜を送りました。

とにかく、小さなことでも（自分なりの）発見は、人生を豊かにしてくれます。ぼくはそれを「知の上昇的スパイラル」と称しています。

「読む」→「書く」→「公表する」→《評価・批判》→「読む」→「書く」→「公表する」→《評価・批判》→「読む」→「書く」→「公表する」→・・・・→

とスパイラル的に知は上昇すると考えています。しかも、最初の「読む」と第二段階の「読む」と異なり飛躍があります。「書く」「公表する」ことにも同じように飛躍があります。

第3節 研究的人生にするための（私の）方法

「類は友を呼ぶ」という諺があります。結局のところ、友人など長くつきあえるためには、共通する価値観や話題を持ち合わせていることです。また、「知と情報は、ギブ&テイク」でないと長続きしません。一方的に価値ある知や情報を貰うことは出来ません。対等な位置で相互交流するためには、自分自身の価値を高めなくてはなりません。そのために一番簡単な方法は、書物を購入し読むことです。それも自分の好きな分野の書物だけでなく、異なる分野や自分にとって新分野の書物に挑戦することです。自分が読む分野の書物の幅が広く深いほど、広く深い交流が生まれやすくなります。

文科系・人文系の分野の方は、理工系分野や社会科学系分野も挑戦することです。理工系分野の方は、人文系・社会科学系や文科系も挑戦することです。ぼくの専門は数学です。数学は理工系分野と思われているかもしれませんが、現在のほとんどの学問はある意味で数学化しています。経済学の数学化はものすごいです。著名な数学者角谷静夫（1911年－2004年 *エール大学教授, 娘の角谷美智子はアメリカで有名な文芸批評家）による不動点定理は、近代経済学の中心に位置しています。角谷不動点定理は、ノーベル経済学賞を受賞した数学者ジョン・ナッシュによる貢献で有名になりました。ハリウッド映画『ビューティフル・マインド』はナッシュの生涯を感動的に画いた作品です。社会学の中でも数理社会学の本は、はじめて読むと数式に驚かされるでしょう。政治学でも例外ではありません。「アローの不可能性定理」は経済学者ケネス・J・アロー（1921年－）による社会選択理論です。これは政治学でも非常に重要です。むしろ政治学の定理です。1971年ケネス・J・アローはノーベル経済学賞を授賞しています。一方で理工系の方でも読者を強く意識した分かり易い著述が求められています。趣味とは別次元の読書が求められるのです。自分の専門分野だけに閉じ籠もってはいけません。日本ではサイエンスライターがあまり評価されていません。理工系の方々による文科系的な意識が乏しいのです。欧米の研究者のキャリアを見ますと、数学から経済学へ、電気工学から数学へなど分野の垣根を平然と越えています。現代学問研究の祖が古代ギリシャの哲学者アリストテレスだとすると、それから学問研究が分化したのですから、欧米の研究者は違和感がないのかもしれませんが。とにかく、少し難しいと思われる本に挑戦することです。自分の好きな本だけを購入し読むだけでは、脳は活性化しません。研究的な読書にならないからです。最近の書店は、安直な本が増加していますが、インターネットなどで探すと書店に並ばないものがたくさんあります。古書店のHPを見ますと流通しない本がたくさん出ています。これも愉しみです。

特に、交流する相手のことを知ることで。たとえば、少なくとも交流する相手の著作や

論文を読むことです。交流する相手を好きになる事とも言えます。そうでなくては交流は成立しません。交流は恋愛のようなものです。

書物（本）や資料は自費で購入することです。少なくとも給与の10%くらいは購入することです。自費で購入するからこそ書き込みも自由です。読書の本気度が高まります。自己投資です。はっきりいって、教員をしていて書物を自費で購入しつづけることが、精神の退廃をふせぐ唯一の方途です。

野菜栽培にしても、少し見慣れない野菜、異なる育て方など、交流のスタートになります。実験野菜栽培では、経済的なリスクをあまり考えません。そこが一般の農家と異なります。逆に、実験的な栽培は、一般的な農家に刺激を与える可能性もあります。一般的な農家を見ていると、経済的なリスクがありますから、毎年同じような野菜を同じように栽培しています。それでも天候や害虫や害獣など諸条件によって、収穫は変動してしまいます。人間の力ではどうしようもない現実日々直面します。これこそ大自然そのものです。自然を介した交流とも言えます。人間は自然を前にすると謙虚にならざるを得ないのです。野菜の実験栽培の例として、トウモロコシ栽培があります。通常は盛夏に収穫しますが、トウモロコシのタネを8月立秋のころ蒔きます。収穫は、10月末になります。トウモロコシが生長する9月10月には害虫がほとんどいなくなります。北海道で生活した人の話によりますと、北海道の気候と同じようなものだといいます。一般的な農家の人は、トウモロコシは夏の作物という常識があるからです。常識にとらわれないことが大切なのです。このことは学問研究に通じます。研究こそ、これまでの常識にとらわれない発想が最も重要だからです。

第4節 研究的人生にするための日常（私の場合）

<私の現職時代>「忙しい！」を言い訳にしない。「走りながら考え、考えながら走る」これが私が心に秘めたモットーです。これは第1節でも書きましたが、箇条書きでまとめますと、

(1) 短期的問題解決と中長期的な問題解決を並行して考え行動する。

(2) 毎日問題（課題）を箇条書きにする。解決したら、1つずつ消してゆく。そのためには優先順位を付けることです。ぼくの優先順位の付け方は、他の方々の迷惑をかけないようにすることだけは考えました。特に、子ども達や生徒達にかかわることです。

(3) 子供、生徒、保護者や教職員に言いたいことを文章で書き公表する。話し言葉だけでは誤解を生みやすいからです。公表する前に、他の方々に読んでもらい訂正や修正も行うことも大切です。かたくなに自説を押し通すことは、社会的な混乱を招くことになるからです。

(4) 数学史関係の本だけでなく、あらゆる分野の本を読む。そのために本は給与の10%くらい購入しつづけることです。退職した現在でも、少なくとも研究史料は優先的に購入しつづけています。

第5節 書くことは前進するため。前進するためには書くこと。

テレビを見ることよりも、本を読むことは積極的な行為です。本を読むことよりも積極的な行為は、書くことです。さらに積極的な行為は、書いた文章を公表することです。

書くことを躊躇したり、苦手と思っている方もいます。しかし、ぼくは書くことそのものが前進的な行為だと思っていますから、躊躇したり苦手意識をもつ必要がないと思っています。

①「前進的な思想（思考）は書くことによって創られる！」

これはぼくのこれまでの体験です。また、

②「前進的な思想（思考）は書くことによって鍛えられる！」

③「前進的な思想（思考）は書いて公表することによって確かなものになる！」

などとも思っています。

ぼくは教師は書くことで前進すると思います。農家が耕作をし、種を蒔き、作物を育てることと同じです。「種を蒔かなければ、芽は出ない！」「芽が出ても、日々面倒をみなくては大きく育ちません！」

第6節 教員の不祥事は、なぜ起こるのでしょうか？

さて、教員の不祥事・事件が続発して、ニュースなり社会的な問題になっています。静岡県教育委員会教育長が「万策尽きた」と報道（*2011年10月22日：読売新聞など）で言うほどの深刻な状況です。学校と教員の信頼を失墜させるだけでなく、それは直接に子ども達や生徒達は、教員の教えることに不信になります。教育そのものが成立しないのです。

なぜ、そのような教員が生まれたのでしょうか？。一つ一つの事件の様子は異なり様々でしょう。しかし、ぼくが思いますのに、事件を起こさないまでも、個々の教員をつぶさに観察しますと、問題があることに気付くはずで、教員間のコミュニケーションが少ないのでしょう。指導管理的な立場にある教員と一般教員との間に問題があるかもしれません。ぼくが現職で管理職のときは、個人面談をしました。全教職員対象がやりやすいです。個人面談ですから、個人の悩みもじっくり聞くことができました。そのような中で、管理職と教職員という上下関係ではなく、人間としての信頼関係が生まれてくるのです。信頼関係は「はじ

めから存在する」ものではなく、「育てる」ものです。

ニュースなどで事件を起こした教員についてその学校の管理職が、「普段熱心な教員で・・・」などとコメントしているのを読みます。一般の人からすると「ホントかな？」と思います。

上（*教育委員会や管理職）から見て「問題を起こさなければ、それでいい！」という雰囲気こそが、非常な問題だと思います。このような雰囲気の中に精神の退廃を見ます。問題の本質を直視しないのです。むしろ、問題化するのを避ける場合さえあります。

逆に言えば、一般教員の側から見れば、評価が適切であるか問題になっているとも言えます。中学校や高等学校では、部活動に異常に熱心になる教員がいます。部活動は勝敗がはっきりしていて評価がしやすいからです。世間の評価も報道などで分かりやすいからです。（*ぼくの20代から30代前半までは部活動〔卓球指導〕に明け暮れましたので実感しています。）ある県のある地域では、部活動の指導者を重視した人事異動がなされるそうです。部活動を全国的に有名にすることで、学校全体のネームヴァリュウを上げ、その結果生徒達も集まるので非常に都合がよいのでしょう。また、いわゆる進学校の進路指導は、有名大学へ入学させた人数などで評価できるかもしれません。学校が予備校化しているのです。これも部活動と同じようなものです。ぼくは学校教育として非常に問題があると思います。それが教員評価に直結していることこそ問題です。学校は学舎（まなびや）なのです。学校本来の目的から大きく逸脱したところになっているからです。理想的過ぎて非現実的な考えという御意見や感想もあろうかと思いますが、何事も本質や根本から考えることです。研究とは本質や根本から考察することが出発点です。

ところが、教科指導や生徒指導は評価が難しいと考えられています。学問研究の評価など問題外なことです。学問研究など余分な趣味としか思われていません。

高等学校で学問研究がどのような評価されているのか詳細は知りません。ぼくの言うところの学問研究など、ぼくが所属していた中学校教育界では評価するどころか、「余分なことするな！」「生徒にかかわる教育や指導をしろ！」と言われ続けられました。よくても無視され、陰で「学者ですね！」皮肉られていました。「学者はいらない！」と直接言われたこともあります。

それは「教師の原点は、自分自身が学徒である！」「教えることは、学ぶことである！」「教師自身が研究していることこそが、最も大きな教育力である！」という基本的なテーゼが、現在の教員社会に希薄であるからです。教員社会に知的な上昇スパイラルなど望むことができないのです。従って、極論すれば、教員社会全体に精神の退廃をもたらしているので

す。ぼくは、これらのことが、教員の不幸事の根柢に大きく横たわっていると思います。

第7節 具体的な一つの提案

教員個人あるいは教員集団及び学校を改革することは容易なことではありません。具体的に一步でも二歩でも前進する方法が必要です。改革の目標は、学校の本来的な目的、すなわち学舎（まなびや）にすることです。学舎（まなびや）は、当然生徒たちが学ぶ場ですが、それを指導する個人個人の教員自身と教員集団自身が学徒であり研究者であることです。生徒達だけに学びを強要しながら、教員達は学問研究に努力も進歩もない状況は不健全です。まさに教員、教員集団、学校自体が、精神の退廃を招くのです。

そこで一つの提案をします。ある地域あるいは学校単位で「学問研究及び学校改善の提案活動」を推進したらどうでしょうか。大切なことは、ほとんどの教員が参加できることです。少なくとも70%以上の教員が参加できるように設計することです。

具体的には、

- (1) A4用紙で1枚以上。（*およその書き方、マージンなどを決めておいた方がよい。）
- (2) 期間を設ける。（*1ヶ月ごと。学期ごと。1年ごと。等々）
- (3) 評価は全員投票で決める。（*民主的に。公開で。愉快地に！。）
- (4) 最優秀者の研究や提案には、御褒美を。（*単著の出版。手作り賞状。）
- (5) 優秀者の研究や提案にも、御褒美を。（*研究や提案内容の抄録を出版。手作り賞状。）
- (6) 印刷出版は、最初学校の印刷機です。ページ数にもよりますが、1部1000円くらいで販売する。200部作製し100部くらいは寄贈する。その出版物は、商業出版社で出版できることもある。
- (7) 活動を継続するための組織づくり（*提案委員会。評価委員会。編集出版委員会など。）

第8節 日常生活を研究する

表題にもどって「研究的生活とは何か？」を考えてみましょう。「研究的生活とは何か？」それは日々の生活の全てに好奇心を持ち、少しでも改善・工夫・改革を実践することです。

日常生活が平凡でつまらないものと考えているのでしょうか。もしこのように考えている人がいたとすれば、その人は全てのことに興味関心が持てなくなった人です。誤解を恐れず申し上げますと「すでに、精神の退廃を招いている」のです。

日常生活で最も重要なことの一つに、食生活があります。人間は調理して食べ物を摂取します。「男子厨房に入らず！」というような言葉があって、特に一般的に男性は調理をしな

い人が多いでしょう。もちろん、男性の中にも調理が好きで、プロ級の腕前を持っている人もいます。ぼくは調理が好きです。料理番組などメモをとります。ぼくは調理は教育の素材として非常に良いものだと思っています。調理の決め手は、素材の生かし方と塩加減、火加減です。調味料を入れる順序として「さ・し・す・せ・そ」といいます。食塩よりも先に砂糖を入れます。何故か考えたことがあるでしょうか。調理するとき、先に食塩を入れると、非常に塩辛くなります。あわてて砂糖を入れても素材の内部の塩辛さはあまり変わりません。この現象の理由は、化学的現象として考えると簡単に説明できます。食塩は水に解けるとイオン化します。イオンには、+イオンと-イオンがあります。よく知られているように食塩 $\text{NaCl} \rightarrow \text{Na}^+ + \text{Cl}^-$ となります。すなわち、ナトリウム・イオンと塩素イオンに分解されます。イオンは原子です。それに対して、砂糖は大きな分子です。高分子です。砂糖（蔗糖）は12個の炭素原子と22個の水素原子と11個の酸素原子が結びついた高分子構造になっています。イオン原子と砂糖分子の大きさは、桁違いです。鍋に先に食塩を入れると、後から高分子の砂糖は素材に浸透できないのです。火加減も同じように、素材の状態が変化してしまうからです。調理素材の細胞（の状態）を火加減によってコントロールしているのです。細胞をできるだけ壊さない方法と壊す方法とに分けてもよいでしょう。素材に包丁で切ったり叩いたりするのも細胞をどのように処置するかという問題です。魚の刺身づくりで切れ味の鋭い包丁で切るのは、できるだけ魚の細胞を壊さないようにするためです。反対に魚のたたきは、細胞を壊すためです。すなわち、調理を物理的に考察することです。

調理（料理）は科学的に考察しますと非常に理解でき面白い教育的な素材になります。このように調理という日常生活の中に、多くの研究的な素材が潜んでいるのです。

第9節 結語にかえて — 教員から教師へ、そして「人生に無駄なことはない！」

小学校、中学校、高等学校などの教員になるためには、教員免許状を取得し、採用試験に合格することです。ある人曰く「教員になるのは、自動車の免許を取り運転するより簡単だ！」。

しかし、教員になれても「教師」になるのは容易なことではありません。通常、教員＝教師のようにいいますが、全く異なる次元にいると思います。ぼく自身37年間の教員生活を過ごしてきましたが、はたして「教師」に成り得たか、いささか不安です。

教師は生徒達にとってあらゆる意味で「指導者」なのです。例えるならば、人々の集団が大きな砂漠を横断しなければならないとき、指導者は進むべき進路を適確に指示し集団の生命を守る立場にいるのです。集団の生死が指導者の手中にあるのです。もし指導者の指示す

る進路が間違っていたときは、その集団は全滅するのです。大海原を船で航行し次の陸地を目指す場合も指導者の役割は同じです。はたして、多くの教員に「指導者」としての覚悟があるでしょうか。特に、校長・副校長・教頭といった指導的な立場にいる教員が「指導者」という立場を強く意識して考え行動しているのでしょうか。一般の教員も学級や学年、部活動の生徒からすれば、「指導者」であって欲しいのです。一般社会もどの教員も「指導者」であって欲しいと思っています。

大砂漠を横断し、大海原を航行するためには、単なる経験の積み重ねだけでは無謀です。昔この砂漠を横断したとき、「あのへんにオアシスがあったはずだ！」という勘で行ってみたところ、そのオアシスは干上がってしまっていることもあります。もっと、初歩的なミスで、進路を勘違いしてしまった場合、集団は全滅します。大海原を航行する場合も同じです。目印になる陸地も島もない大海原では、星（星座）の種類と位置、海鳥の種類と飛翔する方向、海草などの漂流物、海流の色や方向など様々な科学的な知見が生死を決定づけます。また、長期の航海に耐えうる船体の強度が確保されているのか。長期間の航海に耐えうる食料や飲料水が確保されているのか、など様々な課題を克服して次の陸地や島にたどり着けたとき、人は指導者になれたのです。そこでは単なる個人的な経験や体験だけではなく、人類が営々と育ててきた叡智から学ばなくてはなりません。それは、天文学や暦学の知識であり、数学であり、気候学であり、気象学であり、海洋学であり、海洋生物学であり、造船学であり、・・・あらゆる総合的で実践的な智慧です。そのうえ、集団の全員を納得させ信頼させるだけの力量が必要です。全員にふさわしい役割を与え、集団に貢献している実感を与えられることです。困難を克服し集団を励ましつづけられる「勇気」は大切です。集団の弱者を守る「やさしさ」などがなくては、集団は空中分解してしまいます。言語学的に見ても合理的に解釈できる「言葉・話術」も大切な要素です。指導者の「言葉」は非常に重要です。「言葉」が全てとも言えます。これが指導者に必要な資質です。

教員はどのようにすれば教師になれるのでしょうか。教師が前述のような指導者像を意味するとすれば、教員が教師になることは容易なことではありません。教師になる努力を日々実践していくしかないと思います。しばしば職人が「生涯修業です！」という言葉で語られるように、「教員は生涯学徒である」ことによって、少しずつ教師に近づいていくのです。

一人の教員が少しずつでも教師に近づいてゆくためには、研究的教育、研究的勤務と研究的生活を地道に実践することしかありません。実際の場面では、一人の教員が直線的に教師に近づくものではありません。むしろ、多くの困難に遭遇し、挫折しそうになることもあるでしょう。失敗もあるでしょう。正面から風を受けたヨットはジグザグに前進するしかでき

ません。それと同じです。しかし、それら全てが本質的に重要です。「人生に無駄なことは、一つもありません」。むしろ「無駄にしてはいけない！」のです。全てのことを研究的に考察し実践すれば、無駄になりません。人生における紆余曲折の一つ一つに意味があります。一つ一つの事柄を研究し、それを血肉化していったとき、教員は教師に近づきつつある実感が必ずもてると思います。

第10節(補遺) 退職後の長い人生を豊かにするために…身の丈にあった生き方、暮らし方

日本人の寿命は80歳を超えています。周囲を見ても、80歳以上の方々がたくさんいます。そうしますと教員を定年退職してから20年以上生活することになります。教員生活は大学4年学部卒ですと38年間です。従って、定年後の生活時間は教員の生活時間の半分の長さです。この定年後の生活をどのように生活するかを考えることは大切です。それは個人の問題でもありますが、社会的な大きな問題でもあるのです。

- ◎新しい人間関係をつくる。（*自閉的になりやすい。アルコール依存等。）
- ◎孤独を愉しめるようにする。孤独に強くなる。（*高次元の生き方を目指そう！）
- ◎自給自足（可能な限り）を目指す。→「年金が減っても、ゼロになっても生き抜くぞ！」
- ◎自立・自律的な生き方を追究する。
- ◎「退職してから考え実行する」？＝年齢とともに体力は確実に衰える
- ◎できるだけ早いスタートを（*現在の仕事と関連づけながら）
- ◎学問研究でも「身の丈にあった研究」がある。

<私の退職後>

◎数学史の論文を書く。学会や研究会へ出かける。地域の文芸誌に書く。依頼されて文章を書く。脳が活性化する。意外な人から連絡がある。自分を再認識してもらえる。

◎200坪の畑で20種類くらいの野菜を栽培する。生育過程が喜びになる。時間がゆっくり流れる。目と脳が癒される。野菜を他の方へ差し上げることで喜んで頂ける。新しい人間関係が作りだされる。

[謝辞] 本稿は、2011年（平成23年）12月14日静岡県藤枝市にある相川学園静清高等学校でおこなわれた「志太榛原地区：高等学校副校長・教頭会」での講話（アブストラクト）を加筆したものです。出席された方々は、静岡県立高校および私立高校の担当校長、副校長・教頭です。当日の参加者は30数名でした。（*所属会員は41名になるようですが、所用で欠席されていました。）午後2時15分からの1時間（*睡魔に襲われやすい時間）の

講話でしたが、熱心にお聞き下さり、いくつかの質問も頂きました。和算史の講話を期待されていた方もいらっしゃったようですが、ほんの少しになり次の機会としたいと思います。貴重な時間を頂きましたことを感謝申し上げます。特に、担当された先生方にはたいへんお世話になりました。ぼくのことを「若々しい！」とおっしゃって下さった方もいたといいます。もしそうであるならば、研究的生活の効用かとも思われます。